

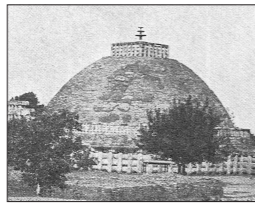
各塔の専門的仕様についての詳しいことは、塔ごとの説明の下段に久松純一郎様の資料から転載させていただいています。塔の歴史や全般的な知識等については、私は専門外なので、塔研究者である中西亨様の著書『塔の旅』から許可を得て引用させていただきます。中西様の文章は分かりやすく理解でき、また楽しく塔の魅力の世界に導いていただけます。

(なお、文中の漢数字は算用数字に変更、中タイトルは私が追加した)

塔の遍歴と構造について

塔の起源

仏塔の起源はいうまでもなく釈迦の御骨即ち「仏舎利」を納める施設に始まる。釈迦は紀元前五世紀の人で、その涅槃のあと、火葬に付されて仏舎利は八つの国に分割奉祀されたと伝説は伝えている。少し下がってアソカ王の時、それらを集め再分し、改めて84,000もの仏舎利塔が各地に建てられた。この時の仏舎利塔の一つが、



サンチー・大スツーパー

少し後のシュンガ朝時代に大きく覆われたのが今西インドのサンチーの地に残る大スツーパー(仏塔)であるとされている。この形の塔は、仏教の隆盛に伴ってインド各地から更にまわりの国々へ伝えられてゆく。南東にむかった流れはスリランカ、ビルマ、タイ、さらにインドネシアで大発展し、今も巨大なこのスツーパー様式の塔遺蹟を各地に残している。一方北西にむかった流れは、ガンダーラ(今のパキスタン)の地でカニシカ王等の力で発展する。こちらの方の流れにもタキシーラのダルマラジカ塔のようにサンチー様式の仏塔も造られたが、一般的には、より高くまた方形化し、土饅頭の部分即ち伏せ鉢が相対的に小さくなり、それに対し基壇と相輪部が大きくなっていく。この形が中央アジアに入り、更に中国本土に入ったのは、後漢の頃だろう。

当時の中国はすでに相当な先進国で、樓閣建築などもよく発達しており、そこへ入って来た仏教のスツーパー様式が樓閣建築の上に載って、ここに中国塔の原型ができたと考えられる。サンスクリットの「スツーパー」の語が漢語で「卒都婆」或いは「卒塔婆」等の文字に訳され、これが略されて「塔婆」、更に「塔」と称されるようになる。ところでこうした中国塔の当初の姿を今に伝える資料はないが、少し下がって五世紀北魏の時代になると大同西郊の雲崗その他の石窟のレリーフに北魏期の塔の姿が表わされ、中にはかなり奇抜な形も見られる。その姿は我が国大和長谷寺の法華説相図(白鳳)の仏塔にも近い感じだ。現在の中国には古い木造の仏塔建築は存在せず、遼の清寧2年(1056)建立の山西省応県仏宮寺の塔が最古とされている。この塔は木造だが、初層にレンガを用いている。八角5層で、各層に仏像を安置するが、先の雲崗石窟のレリー

フ等にも各層に仏像の姿が刻まれている。この平面が八角型、材料はレンガが主、仏像は各層に安置という中国塔は、我々日本の塔とはかなり大きなちがひがあると言えそうだ。

日本へ伝来 飛鳥・白鳳時代

この中国の仏塔が朝鮮半島を経て日本の地に伝わる。そして581年、日本最古の塔「大野丘の塔」の出現を迎え、ついで遺跡が発掘されて有名になった飛鳥寺法興寺の五重塔(593)の建立となる。以後急激に塔の建立は大和を中心に各地に広まり、現在かなり広い地域に飛鳥・白鳳期の塔址を見出すことができる。

奈良時代から平安時代

奈良時代に入って仏教は空前の繁栄を迎える。驚くべきスケールの東大寺伽藍 そこには高さ100mにも及ぶ七重塔2基が相対していたを頂点とする国分寺の群 そのそれぞれに今の東寺五重塔級の七重塔1基があったが大抵の国に建立された。その他のほとんどの大寺院にも塔があり、その華麗さを競いあった。平安時代に入ると、大塔とその省略型の多宝塔が現れる。層塔の方も都の京都を中心にものすごい数の塔が建てられたが、平安期の繊細な構造の塔はほとんど跡をとどめなかった。

鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代に入って南都復興に伴い「天竺様」(てんじくよう、「大仏様」とも言う) さらに「唐様」(からよう、「禅宗様」とも言う)の新様式が入ってくる。この時になって以前の様式が「和様」(わよう)と呼ばれることになり、これと新しい二つの様式が混じりあい、折衷様式が生まれる。

塔の分野では、大体和様が中心で、唐様の塔も建てられた。更に部分的に唐様様式を取り入れた塔も多くなる。天竺様の方は木鼻など細部に僅かの影響を及ぼすにすぎなかった。以後日本の建築は他の分野ではいろいろ新しい形態も生まれるが、仏塔建築には大きな変化は現れない。

江戸初期

江戸初期に入った黄檗様式も塔には関係がなく、幕末を迎える。ただ江戸期には「規矩」(きく)と呼ばれる寸法の標準体系ができ上がり、型にはまった建築ばかりが建てられるようになってくる。また細部が重要視されて全体のバランスに優先するようになってしまう。かくしてできた江戸期の塔をひどく悪

くいう人も多いが、私は、中期以後の五重塔はともかく、三重塔や多宝塔は江戸期のもので決して形は悪くなく、大部分の塔は建築としてすぐれた形態を示していると思っている。

明治維新 神仏分離政策

かくて明治維新を迎えるが、時の政府の神仏分離の政策によって神社の塔の多くが毀却された。まことに残念なことである。1,000年に近い本地垂迹説による神道と仏教の文化の融合はもはや分離し得ない状態になっていたのに、それを無理に分けたための最大の犠牲が、神社における塔などの仏教的施設であった。多くの塔がその姿を消したが中には幸いにも毀却を免れ他へ移建されて今に伝えられた例もいくつかある。また仏寺の方も、保護者を失って衰微、その塔は修理の手が及ばず朽ち果てて姿を消した例も少なくない。明治も半ばになると、古文化財の保存が叫ばれるようになり、国宝保存法ができて修理の手がさしのばされ、壊れかけた古塔が危なく消滅を免れた事例も少なくない。一方、この明治・大正期にもかなりの塔が建てられている。

昭和から現在 造塔ブーム

昭和に入って今次大戦でいくつかの塔が失われたが、塔の分野では城と違ってその数はそれほど多くなかったのは幸せであった。そして昭和も30年をすぎると日本経済の躍進に伴って造塔ブームを迎え、昭和になってすでに百基を超える塔が建立されている。特に今年(昭和59年)弘法大師千五百年大遠忌を迎えた真言宗では相当多くの塔が建立された。昭和建立の塔の中には防災上または工費の関係でコンクリート造のものが少なくなく、一時はこちらが主流になりかけたが、近年木造のよさが再認識され、本式の木造塔も多く建てられるようになった。ただ大型の塔は材料的に、また市街地の塔は防災の見地からコンクリート造になるのは止むをえないが、私はなるべく木造にするようにおすすめしている。かくてでき上がった塔は、いずれもそれぞれの寺院のシンボルとなるにとどまらず、その所在する都市のシンボルとして多くの人に仰がれ親しまれ、信仰のしるしとして、また日本の代表的景観を形作るモニュメントとして、更に日本建築の精髓を示すものである。

それでは現在の塔はどんな形なのだろうか…。

仏塔の種類

「仏塔」の種類は非常に多く、前に書いた本来の名称「卒塔婆」(そとば)の名で呼ばれる木片の小さなものから、石造でよく見られる五輪塔・宝篋印塔、あるいは笠塔婆や青石塔婆といったいろいろな仏塔があり、また木造・金属製、さらには粘土や水晶の小さな塔も少なくない。

しかし「建築としての塔」、つまり人間が内部に入り得る塔となるとずっと限定されてくる。建築としての塔と言っても海外ではレンガ塔や石造塔の例も少なくないが、日本では一応木造及びその形態を模した新しいコンクリート造りの塔に限られる。またその形は三重・五重といった層塔と、宝塔系の諸塔即ち大塔・多宝塔・宝塔・瑜祇塔に限られる。そして大きさが建築として人の入り得る大きさとなると、初層の軒高、またそれに関連して一辺の幅が6尺余即ち2m弱というのが最小値となって、一辺が1.8m以上の木造或いは木造風に造られたコンクリート造りの層塔と宝塔系諸塔が対象になっている。従って石塔全部、工芸品として作られた小さな塔、そして大きくはあるが建築とはいえない相輪塔(そうりんとう、塔の相輪だけを地上にたてた形の金属製の塔)と土塔(奈良の頭塔のように土をつみあげた塔)、そして最近各地に多くつくられた仏舎利塔は対象にしていけないが、同一寺院内にこういった塔があるときにはなるべく言及しておくので、それらにも立ち寄られることをおすすめしたい。

層塔と宝塔系諸塔

「建築としての塔」は、層塔と宝塔系諸塔の二つに大きく分けられるが、それをもう少し分類して見てみよう。

層塔

まず最も代表的な形の塔として親しまれている「層塔」からみることにしよう。この層塔の層数は必ず奇数になる。偶数の二重塔というのは実際に見られるが、これは経蔵のような重層の建築に相輪をつけた堂と考えておこう。こんな形は本来なかったのだが、昭和に入って10余基はつくられただろう。困った建築だ。三重塔は塔として最も実例が多い。100余基が現存するが、どの時代のものでもおおむねすばらしい。五重塔は昔は本山級の寺にしか建てられなかったもので、その数は多くない。尤も昭和30年頃簡単な略式五重塔が一時東日本に流行したことがあ